デジモンアドベンチャー Alt

しゃらく

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

デジモンアドベンチャーｔｒｉのオリジナル小説です。

短編小説、デジモンアドベンチャー　Ａｌｔ　Ｚｅｒｏから一応繋がっていますが、今回から連載させてもらいます。

舞台はデジモンアドベンチャーから６年後、八神太一達が高校２年生になった２００５年になっています。

成長した選ばれし子供達とデジモンたちの戦いの中での立ち位置を考えながら書いていこうと思います。

拙い文章ではありますが、お付き合いいただけたら幸いです。

目次

第一話　邂逅a　1
第二話　無色　7
第三話　襲撃　12
第四話　要請　17
第五話　日常　22
第六話　ゲート　31
第七話　歓迎会　39

第一話　邂逅ａ

第一話　邂逅ａ
２００５年４月２日
ＡＭ７：００

「お兄ちゃん、朝練遅刻するよ！」
　朝の光ヶ丘に元気な声が響く。
「あと５分…」
「キャプテンなんだから！しっかりして」
　女の子の力とはいえ、全力で揺さぶられては寝てもいられず、八神太一はベッドを降りることになった。
「やば、こんな時間？」
　手元の目覚まし時計は７時５分、太一の通う高校までは自転車で最低２０分はかかる。
　今から家を出ても３０分からの朝練に間に合うかは怪しい。
「カバン、玄関に置いておいたから、はやく！」
　側に立つ妹の光は、今年で中学３年生。
　昔はいつも太一の後を付いてきていたのに、いつのまにかしっかり者の妹に成長してしまった。
「悪いな光、それじゃ、行ってきます！」
　大慌てで壁にかけておいた制服を着て、階段を駆け下りて行く。
　息も切らせず駐輪場に駆け込むと、中学生時代から乗り続けているママチャリに跨り、強くペダルを踏み込む。
「本格的にやばいな」
　信号待ちですら煩わしい。
　いつもより１５分ほど遅く出ているせいか、人の通りが少ない。
　幾つかの信号は点滅で駆け抜け、家を出て１２分程度で校門に飛び込んだ。
「あれ？」
　グラウンドにいるはずのサッカー部員達の姿が見当たらない、おまけに、他の部活の人々や先生の姿もなく、高校全体が閑散としている。

「おかしいな…、そういえば、来る途中に誰かに会ったか？」
太一は記憶を辿る。
階段、駐輪場、大通り、交差点、コンビニ、人はおろか、車の通りもなかったではないか。
偶然にしては出来すぎている、はっきり言って異常だ。
何かまずいことが起きている、そんな本能的な危機感に身構えていると、携帯が鳴った。
発信先は、石田ヤマト。
「ヤマトか」
『よかった、繋がったな』
「一体どうなってる？」
『俺に言われてもわからん、今、どこにいる』
「高校だよ、ヤマトは」
『俺は家だ、とにかくそっちに向かう、動かないでくれ』
「分かった」
そう言って、ヤマトからの着信は途切れた。
光はどうだろうか？
慌てて履歴から八神光を呼び出すが、出る気配はない。
そういえば、以前もこんなことがあった。
5年ほど前の夏休み。
あの時に、太一たちに投げかけられた言葉は何だったか。
『ア　ソ　ボ？』
全身に悪寒が走る。
声の主は見当たらない。
「どこだ」
無意識に左手はポケットに入っている堅い物を握る。
太一は分かっている、彼らは、ここにいない。
それでも周囲を見回しながら、強くそれを握りしめる。
『コ　コ』
真上だ。
恐ろしく動きの悪い首を上に向けると、真っ赤な目がこちらを見下

ろしていた。
空が避けている。
ソイツは顔から、手へ、胴体へ、脚へ。
まるで虫のような滑らかで不気味な動きで這い出してくる。
「ディアボロモン」
太一は身動きも出来ずに、かろうじて動く口を開いてソイツの名を呼んだ。
深紅の爪がゆっくりと後ろに引かれる。
太一は瞬き一つできずに、固まっている。
逃げられない。そんな確信があった。
ただ、振り下ろされるであろう狂刃を見つめることしかできない。
『?』
ディアボロモンが何かに驚き、上を見上げる。
今にも振り下ろされそうな爪を何かが掴んでいる。
「人?」
赤い狂刃を掴むその手は明らかに人の物だ。
ディアボロモンが振り解こうとするものの、空の裂け目から伸びた腕は全く動かない。
動かない事に痺れを切らしたのか、ディアボロモンが禍々しい口を腕に向けて開く。
眩しさすら感じる純粋な闇の塊が、腕に向けて放たれた。
閃光と爆音。
太一は衝撃波で吹き飛ばされ、そこでようやく体の自由を取り戻した。
「どうなったんだ」
巻き上げられた土煙は、空まで舞い上がり、視界を隠している。
『ゴアアアアアアア!』
ディアボロモンの咆哮が、砂塵を吹き飛ばした。
焦っている。
太一の知るディアボロモンは常に余裕を持って笑いながら戦闘をしていた。

しかし今の奴の声には明らかな焦燥が見られた。
一体、何と対峙しているのか。
顔についた砂を払い、必死に視界を確保した太一が見たものは、グラウンドに対峙するディアボロモンと、一人の少年だった。
顔までは見えないが、遠目からでも病的なまでに細く白い少年の右手には、見覚えのある不釣り合いな大剣が握られている。
少年はディアボロモンから5メートルほどの距離から動かない。
『ア　ソ　ブ？』
無機質なそれでいて人を煽るような声を発すると、ディアボロモンは目で追いきてないほどのスピードで5メートルを突進した。
少年が大剣を一閃したと気づいたのは、ディアボロモンの身体が袈裟懸けに切り落とされ、霧散してからだった。
少年は大剣を地面に引きずるように振り返り、データ片を眺めている。
太一はどうしてよいか分からず、一歩ずつノロノロと彼に近づいていく。
「あの…」
普段からは考えられない情けない声が出た。
よく見ると少年は太一と同い年くらいだろうか。
一秒ほどかけて緩慢に視線を上げると、太一の方を見た。
「ケガ、ナイ？」
片言のような、絞り出すような声が少年から発せられる。
怪我がないか、と聞かれている事を間が空いてから理解した太一は、ああ。と答えた。
「ヨカッタ」
ボロ切れのような外套のポケットから、携帯のような端末を取り出すと、何やら操作を始める。
すると、傍の大剣が粉々に砕け散った。
「コレモ、モウダメカ」
さして悲しくもないような声色で呟くと、何かに気づいたように太一に目線を戻す。

その視線は太一が握りしめているデジヴァイスに注がれている。
「デジ…ヴァイス？」
「知ってるのか…？ひょっとして、お前も選ばれし子供？」
少年は理解できないのか、首をゆっくりとかしげた後、そのまま地面に倒れこんだ。
「おい！」
慌てて駆け寄り少年の身体に触れる。
ゾッとするほど冷たい手。
本当に生きているのだろうか。

「お兄ちゃん！」
いつの間に寝ていたのか、目を開けると自室の天井と、妹の顔が目に映った。
「あれ？オレ」
「朝練、遅刻するよ？」
時刻を見ると６時４５分。
いまいち状況が理解できない。
太一は確かにグラウンドに居たはずで、ディアボロモンに襲われ、少年に助けられた、その後少年の手に触れたところで記憶は無くなっている。
「お兄ちゃん、顔色悪いよ？お休みする？」
心配そうに顔を覗き込んでくる光。
「いや、多分大丈夫…」
フラフラする足取りでキッチンに向かうと、母親が料理を作りながらテレビを見ていた。
「あら太一、おはよう。顔色悪いわよ？」
「光に言われた」
「どうせ夜更かししてたんでしょう？空ちゃんとメールでもしてたの？」
「なんで、そうなるんだよ、大体あいつはヤマトと」
「はいはい、冗談よ、早く食べなさい」

全てが釈然としないままテーブルに着くと、太一は進まない箸で朝食を食べ始めた。

第一話　邂逅ａ　完

第二話　無色

「困った…」
　高台にある公園のベンチからは真っ青な海と、人工の島にそびえたつビルが見える。
　心地よい温かな風から、季節が春であることがなんとなく分かった。
「ここは…東京だよな…」
　人工埠頭の建物には見覚えがあるような気がする、もしかしたら行った事があるのかもしれない。
　海鳥が頭上を飛んでいく。
　日の高さからしても、まだ午前中のはずである。
　公衆トイレの鏡で見た自分の顔は、どう見ても学生で、周りからは週末の賑わいは感じられないし、学校に行っていなければおかしい。
　はっきり言って、何が何だか分からなかった。
　目を覚ました時には知らないビルの屋上で寝ていて、訳が分からないまま一時間ほど彷徨ってこの公園にたどり着いた。
　昨日までの記憶が全くない。
　それどころか、反射的に出てくるような物の名前は覚えていても、自分に関する事について考えると、頭の前の方がひどく痛んで、息が苦しくなる。
　それでもパニック状態にならなかったのは、もともとの楽天的な性格によるものなのか、それとも思い出さなくていい、とどこかで考えているからなのか。
「すいませーん、帽子とってもらえますかー」
　不意に声をかけられ振り向くと、少し強い風に乗って、自分の座るベンチの方に、白い帽子が舞って来た。
　これは急いでジャンプしないと、このまま海に落ちてしまうかもしれない。
　そう思った僕は、ベンチに足をかけ、思い切りジャンプをして帽子

の端を掴んだ。
「よかった」
膝を使って着地の衝撃を和らげながら、先ほどの声の主を探す。
「ありがとうございます！」
声の主は中学生くらいだろうか、年齢の割には落ち着いた印象を受ける少女が駆け寄ってきた。
ジーンズに薄手のTシャツを重ね着したラフな中にもきれいな印象の格好には、白い帽子はよく似合いそうだ。
「いえいえ、どうぞ」
汚れがないか確かめて帽子を持った腕を伸ばし、それを彼女がつかんだ瞬間、それは起きた。

「大丈夫ですか?!」
頭の上から声が聞こえる。
「あれ、僕は」
薄目を開けると、左下に地面があった。
なんで寝ているんだ、僕は。
「大丈夫ですか?今、救急車を呼びますから！」
少女は慌てた様子で携帯を取り出しているようだ。
またしても何が起こったか分からないけれど、意識ははっきりしている。
いっそこのまま病院に行くのが良いのだろうか。
「いや、大丈夫、たぶん」
「急に倒れる人が大丈夫なわけないです」
起き上がって顔や服についている土と草を払う。
彼女は携帯に指をかけて本気で救急車を呼ぶか迷っているようだった。
「ガラケー」
その携帯の形が今時珍しい気がして（反射的にそう思っただけで、根拠は思い出せない）、思わず口に出てしまった。
「なんて言いました?」

「いや、今時珍しいタイプの携帯だと思って」
そういうと少女は不思議そうに首を傾げた。その動作に合わせてショートカットの髪が揺れた。
「これ、先週変えたばかりの最新機種なんですけど」
やっぱり、自分に関すること以外でも僕の頭はどうかしているらしい。
「あの、本当に大丈夫ですか？」
「体的には、まったく」
「あ、ひょっとして月島総合高校の人ですか？」
これは全く聞き覚えがない。
しかし、記憶がありません。なんて初対面の人に言われたら完全に不審者扱いになってしまう。
適当なことを言って立ち去るに越したことはない。
「ああ、実は今日は振替で」
「やっぱり、そうなんですか、私も兄も振替でお休みなんです」
よくわからないけれど、ひとまず月島総合高校ということにしておいて、立ち去ろう。
「そうだ、用事を思い出した。今度は帽子を吹き飛ばされないようにね」
そう言って踵を返した僕のポケットから、何か硬いものが落ちた。
淡い水色の握りこぶしほどの大きさの機械のようだ。
「なんだこれ、さっきは持ってなかったぞ」
かがんで拾うと、意外と軽い。そして中央のディスプレイをはじめとして、大きな亀裂が幾つも入っている。
「デジヴァイス」
「え？」
目線を上げると、先ほどの少女が驚いた顔つきでこちらを見ていた。
「やっぱり月島高校っていうのは嘘だったんですね」

「カマをかけてたのか…」
　先ほどの公園から少し離れたところにある喫茶店で、僕と少女は向かい合っていた。
　少女の名は八神ヒカリと言い、この近くの中学校に通っているらしい。
　一方の僕は名前も素性も分からないことを、正直に話した。
「信じちゃうんだ」
「それを持っている人に縁があって、よく不思議なことが起こるんです」
　テーブルの上には先ほどの機械が置かれている。
「デジヴァイス、だっけ。何に使う機械なんだろう」
「無理もないですが、本当に知らないんですね。これは、デジタルワールドと言って、この世界とは違うもう一つの世界の道具なんです」
　デジタルワールド、聞き覚えがあるようなないような。
「あなたが持ち主かどうかは分からないんですが、記憶がないことと、デジヴァイスが無関係には思えないんです」
　このおかしな機械によって記憶がなくなっているなら、勘弁してほしい。
「でも、どうしたらいいんだろう、僕は。現にこうしてお金もなくて中学生にコーヒーをおごってもらっているし」
「それは別にいいですよ、帽子のお礼ってことにしておいてください。でも、記憶を探すためにどう動くか、考えなきゃいけませんね」
　そういって真剣に考え込んでしまう。
「やっぱり病院に行くかな、それとも警察か」
　思い出すにせよ何にせよ、生きていくために名前ぐらいは思い出さなくてはならない。
　さっきから頭に違和感があるし病院が先だろうか。
「病院がいいかもしれませんね、ここからは少し距離があるので、電車で行きましょう」
　そういって伝票をもって立ち上がるヒカリちゃん。
「え？ついてきてくれるんですか？」

「当たり前です、そんな状態の人を放っておけるほど、冷たくありません」

「何から何まですいません…」

二人分の切符を買ってきたヒカリちゃんに深く頭を下げる。

「もう、気にしないでください」

こうして、記憶のない僕は八神ヒカリという少女と出会った。

第三話　襲撃

「受付って、どうすればいいんだろう」
　事故などで記憶がない人が通常、どんな風に物を考えるのか分からないけれど、僕はなんとか常識程度は覚えているらしい。
「うーん。ありのままを伝えればきっとお医者さんも飛んでくるんじゃないかな」
「精神科とかじゃないといいなぁ…」
　とはいいつつも、外傷は全くないし、ＭＲＩとか、それで異常がなければ精神鑑定とかになるのだろうか。
　そうこう言っているうちに、電車は渋谷に到着した。
「渋谷なんだね」
「私も人が多いところは好きじゃないんだけど、総合病院だと、ここが一番いいらしくて」
　ハチ公像がある西口には、平日にもかかわらず、綺麗な服を着た多くの若者がいた。
「この人たちは、平日から何をしているんだろう」
　明らかに学生な僕やヒカリちゃんが言うのもどうかとも思うけれど。
「大学生じゃないですか？」
　僕のイメージする大学生像は毎日研究室に籠るような感じなんだけれど。
「それは理系の方じゃないですか？ほら、キャンパスライフって楽しそうですよ」
　ヒカリちゃんは口ではそういうけれど、憧れているようには見えない。
「ねぇ、何あれ」
「え？マジだ、なんだあれ」
　そんな彼らを通り過ぎようとした時、その場にいた女の子が近くのビルを指さした。
　ガラス張りのそのビルは向かいのビルの姿を映しているはずなの

だが…。
「うっ」
先ほどからの違和感が突然、前頭部の痛みに変わり、僕はその場に膝をついた。
「なんでこんなところに…」
ビルに映る得体のしれぬ穴。
その淵は水面のように歪んでいて、穴の中を見つめるとまるで吸い込まれそうな気分になる。
なぜかその場の全員が、穴から目が離せなくなっていた。
人間に残る本能的な部分が、その穴に近づいて来る何かの気配を感じていた。
『警察です!慌てず駅構内に避難してください!』
近くの男性が、手帳をかざして叫んだ。
それを聞いた人は、堰を切ったように走り出した。
「大丈夫?逃げるよ」
膝をついて息を荒くしている僕に、ヒカリちゃんが手を差し伸べてくれる。
「ヒカリちゃんは逃げて」
痛む頭を押さえて、目線を穴に戻すと、口からそんな言葉が出てきた。
「来た」
『ミイツケタ』
血走った眼、黒と黄土色の体躯。
血に濡れたような爪と角を持ったソイツが、穴から這い出てくる。
「ディアボロモン」
ヒカリちゃんは震えながらそう呟いた。
「あれの名前はディアボロモンか」
いつの間にか、頭痛は収まっている。
僕は立ち上がると、ヒカリちゃんをディアボロモンから庇うように、一歩前に出る。
「これを使えってことか」

手にはひび割れたデジヴァイス。そのディスプレイは弱弱しいながらも、確かに光っている。
「そんな、ゲートは閉じているはずじゃ」
ヒカリちゃんの手にも、似たようなものが握られている。
彼女のものは穏やかなピンクの光を放っている。
分からないけれど、やるしかない。
僕はデジヴァイスの右上のスイッチを押した。
僕らの光に反応したディアボロモンが、ついに完全に穴から這い出てきた。
奴は僕らを見て、禍々しい口をあけて笑うと、赤い爪を振りかぶって跳躍の体勢を取る。
『汝の身は盾に、剣に』
どこからか聞こえてくる声、それと同時に右手の平に熱を感じる。
もはや黒い弾丸となって突っ込んでくるディアボロモンに向けて、僕は右手を伸ばす。
――『Ｒｅａｌｉｚｅ』
とんでもない衝撃。
何とか踏みとどまると、目の前にはあり得ない光景が広がっていた。
ディアボロモンはもと来たビルに激突したようで、ガラスを突き破って店内に倒れている。
一方の僕の右手の中には、白銀に輝く剣が握られていた。
長さは1メートルほどだろうか、その見た目に反して重さはそんなに感じない。
柄の部分には青い宝石のようなものがはめられており、刃面には見慣れない文字が浮かんでいる。
「それって、オメガモンの…」
ヒカリちゃんはこの剣を知っているらしい。
「とりあえず、下がって」
ヒカリちゃんを駅構内まで下がらせると、僕はディアボロモンが転がり込んだビルに向けて剣を構える。

本能的に剣を袈裟懸けに振り下ろす。
またしても衝撃。
今度は吹き飛ばせなかったようで、赤い爪が剣を受け止めている。
反射的に体を右に反らすと、今まで僕のいた空間をディアボロモンも右手が貫いていた。
考えるより先に、体が勝手に動く。
僕はその手を左手で掴むと地面に向けてそれを抑え込む。
握力からしても、こんなことをできるのは人間じゃない。
遅れてくる思考で、そんなことを思った。
ディアボロモンもこれには驚きだったらしく、一瞬剣にかかっている力が弱まった。
それを見逃す僕の体ではないらしく、剣にかかる力のベクトルを上向きにして、相手の爪を跳ね上げると、体の中心、むき出しになっているコアのような部分に、目にもとまらぬ突きを叩きこむ。
僕の意識は、それを目で追うのが精いっぱいだ。
鈍い感触と共に、左手にかかっているディアボロモンの力が抜け、目からは生気が消えていく。
3秒ほど経つと、ディアボロモンの体は花火がはじけるように崩壊した。
『電波災害特例1、私の言葉が分かるなら、その場を動くな』
脱力する間もなく、後ろから声をかけられた。
振り向こうとすると、撃鉄の落ちる音。
体が勝手に反応し、地面についていた剣が振り上げられる。
『やはりバケモノか』
声をかけてきた男は先ほど避難誘導を始めた男だった。
警察官が持つにしては大型の拳銃を構え、こちらから5メートルの位置を取っている。
「あなたは誰です」
『人に名前を聞くときは、まず自分からだ』
「残念ながら、それが分からない」
『やはりそうだったか、ならば教えてやる、付いてこい』

そう言って拳銃で示した先には、護送車、と呼ぶにふさわしい車と、迷彩模様に身を包んだ自衛隊員たちが待機していた。

第四話　要請

「待ってください」
　拳銃を持った男に連れられ護送車に乗ろうとする僕にヒカリちゃんが声をかけてきた。
「あなたは八神ヒカリさんですね」
「なんで私の名前を」
「あなた方は自分が思っている以上に有名なのですよ」
　スーツ姿で目つきが悪い男は、睨むような目でヒカリちゃんを見て言った。
「安心してください、彼が抵抗をしなければ、すぐに会えますよ」
「私は櫻井という」
　護送車に乗り込み、座席に着くと男はそう名乗った。
「あなた、警察じゃありませんね」
　一緒に乗り込んだ武装した迷彩服に視線を移す。
「いや、身分は警察官だ。ただ今回の計画の準備のために駆り出されているだけだ」
　櫻井の差し出した警察手帳は、素人目には本物に見えた。
「計画とは」
「君は記憶がない上に、デジモンと生身で戦って、混乱していないのか」
「逆ですよ、あまりに混乱が大きすぎて、何が起きても驚かないだけです」
　いつの間にか消えていた剣に関して言えば、あれが現れた段階で、過去の自分は普通ではない存在だと確信した。
「過去の僕が何をしていたにせよ、僕は誰かに迷惑をかける人間にはなりたくない」
「その心意気はこちらとしても助かる、ところで君はヒーロー番組を覚えているか」
「いえ、ヒーローという言葉の漠然とした意味は分かりますが」
「テレビの中の人彼らは人々を守るために日々見返りを求めず戦い、

傷つき、そして最終回を迎える」
「それが、どうかしましたか」
「私は不思議に思うんだよ、彼らの行ける範囲に悪者は現れるし、彼らは悪者に対して躊躇なく力を振るい、いつか終わりが来る」
　櫻井は話している内容の割に、真剣な表情だ。
「こうは考えられないか、彼らヒーローがいるから、悪者はやってくる」
「そういった可能性もあるのかもしれませんね」
「君は先ほど現れたデジモンに対して、本能的に力を振るった。そして、一見すると君は渋谷を守ったヒーローな訳だ」
　そういう見方ができなくもないのか。
「君が自身が何者か分からない以上、さっきのような行為を好き勝手許すわけにはいかない、それを取り締まるのが我々だ」
「ごもっともです」
　自分が災害の原因だとは思いたくないが、自分の所為でヒカリちゃんや見知らぬ他の人に迷惑はかけたくない。
「かといって、君の人権、もっとも現時点で君はどの国の人間でもないわけだが、それを無視して殺すこともできない」
「なぜですか」
「我々には先ほどのようなデジモンに正面から対抗する力はない。自衛隊の出動に関しても、総理大臣を始めとした様々な人の承認が必要となる」
　統治された社会の欠点。
「そこでだ、現状の法律を変えている時間もない今、いつ現れるか分からないデジモンに対して取れる選択が二つあった」
「僕を使うことは分かります」
「賢い子供、いや君の年齢は分からないが、そこまでたどり着けるのは助かる」
「もう一つはなんですか」
　櫻井は手元にあったノートパソコンをこちらに向けた。これも旧型に見える。

「八神ヒカリを始めとした、デジモンを使い、デジモンと戦い得る存在、通称、選ばれし子供たちに頼るかだ」
画面には、１０人ほどの学生らしき顔と名前、現在地が並んでいる。
「現在地情報はまずいのでは」
個人情報の観点からして、未成年の動きを監視するのは国家権力としてどうなのか。
「そうだ、これは権力の乱用といっても差し支えない。そして今後、デジモンの出現が増加すれば、彼らを戦略として取り込まざるを得ない」
見ず知らずの自分を助けてくれたヒカリちゃん。彼女たちが、国家の戦力。
「しかし残念なことに、彼らの持つパートナーデジモンはここ数年、この世界に現れてはいない、研究によれば、ゲートと言うものが閉じているから、らしい」
「そこで、取引だ」
「選択肢のない取引は、脅迫と言うのでは」
櫻井はそこで初めて、口の端を釣り上げた。
「もちろん、見返りは十分に用意した。君に新しい戸籍を用意する、そして我々の知りうる君の情報を確実に提供しよう」
「それが果たされない場合は」
僕の言葉に、櫻井は僕のポケットを指差した。
「そこから出せるさっきの剣で、私たちを皆殺しにするといい」

「さっきは櫻井が申し訳ないような事をしたようだね」
打って変わってどこかの執務室に通された僕の前には、初老のスーツ姿の男性が座っていた。
僕の椅子も、シンプルなソファにしてはどことなく風格がある。
「いえ、私としても現状を把握する良い機会でした」
思わず敬語になる。
「彼は少し単刀直入すぎるきらいがあってな」
老人の言葉に、部屋の隅に待機している櫻井が身体を強ばらせる気

配を感じた。
「私の名前は相馬竜也という、この国の総理大臣を務めているものだ」
「事の重大さを尚更痛感しました」
　一介の学生らしき男に対して、総理大臣をぶつけてくるのか。
「なに、出来上がったシナリオを演じる党内の審議など、一度くらい欠席しても構うまい」
「聞かなかったことにしておきます」
「君は見た目の割に、随分と肝が座っているようだね、では、本題だ」
　相馬総理は先ほどの櫻井の説明より詳しい状況を語った。
「現状の分析では、ゲートの出現する場所は主に都心の、通信量が密な地域に多い」
「今まではどう対処していたのですか」
「特殊な電波を被せてゲートを妨害することで、ゲートを閉じていた。しかし、頻度が上がれば現状の体制では対処が追いつかない場合もある」
　そして、残念なことに、と相馬総理は続けた。
「三日前、ついに犠牲者が出た」
　都内に住むＯＬが、ディアボロモンによって連れ去られかけたらしい。
「その方は」
「どうやら君が助けたらしくてな、連れ込まれたゲートの中で、君があれを退けたらしい」
　それもまた記憶にない。
「彼女の証言と君の顔が一致して、今回君をここに呼ぶことができたというわけだ」
　相馬首相は、安心した様子で用意されているお茶を飲んだ。
「我々の推測では、君はあちら側の存在なのではないか、そして君しかあれを退けられない以上、我々は君にお願いする形で、協力を要請したい」
　そついって相馬総理は頭を下げた。
　総理に頭を下げさせる若者というのも、歴史にそうそういないだろ

う。
「分かりました、協力します」
選択肢などないが、別段嫌な気はしなかった。
「戸籍や住居はこちらで用意するし、監視も最低限に抑えさせるだからどうか、我々に力を貸してほしい」
何者でもないより、何かやることがある方がマシだろう、そしてそれが人のためになるなら、迷う必要はない。

第五話　日常

『今日は転校生を紹介する』
『女子？かわいい？』
『いや、男子でしょ、イケメンの！』
『静かにしろ、桜井、入っていいぞ』
まだ糊のきいた制服に身を包み、廊下で手持無沙汰にしていると、教室内からお呼びがかかった。
大きく深呼吸をして扉を開くと、大勢の視線が僕を待ち受けていた。
軽く一礼して教卓の横まで歩く。不思議と緊張はないのだが、新しい靴のせいもあって妙に動きが硬い。
「今日から2—Aに編入する、桜井亮君だ。いろいろ面倒を見てやってくれ」
副担任の西島先生から目くばせを配る、僕のある程度の事情についてはこの人も知っている。
「桜井亮って言います。えーと、ちょっと言いにくいんですけど」
西島が驚いてこちらを見る。一応、ある程度の経歴は偽造で用意されているのだが…
「僕、記憶がありません。勉強や常識については覚えているはずなんですけど、もし変なところがあったら遠慮なく教えてくれると嬉しいです。それと、よかったら友達になってください」
そうやって笑っておく。隠し通せることでもないのなら、最初から行ってしまった方が楽だ。
案の定、教室は微妙な空気になってしまったが。
「あの！」
そんな中、一人の女子生徒が手を挙げた。
「武ノ内空って言います、私でよかったら、分かんないこと、なんでも聞いてね」
そういって笑いかけてくる。
それを皮切りに、俺も、私も、とクラスの大半が笑いかけてくれる。

どうやら、思わぬ形で受け入れられたようだ。
「なぁ、桜井、サッカーに興味ないか？」
用意された一番後ろの席に着くなり、隣の男子が顔を寄せてきた。
「サッカーか、やったことあるかも分からないんだけど、どうして？」
そう聞くと男子は人懐っこい笑顔で笑った、目じりが誰かに似ている。
「いや、一目見た時からさ、なんか運動してたんだろうなって感じがして」
そうだろうか、別段筋肉質なわけでもないと自分では思っていたが。
「歩き方とか見て、軸がしっかりしてるなって」
そこまで見られているのか。
「こら太一、桜井君困ってるでしょ、サッカー部の勧誘だけは本当に熱心ね」
「だけってなんだよ！」
「この人、サッカーの事しか考えてないからね、気を付けて」
そういって男子生徒の向こうから歩いてきて声をかけて来たのは、先ほどの武ノ内さんだ。
「改めてよろしくね、私の事は空でいいから」
「俺は八神太一、太一でいいぞ」
なんだか夫婦漫才を見ているような気になりながらも、僕はある点が気になった。
「僕も亮でいい。ところで、太一って妹さんいない？」
「いるぞ、どうしてそれを？」
「ヒカリちゃんって名前？」
「え？ヒカリちゃんと知り合いなの？」
「昨日会ったんだけれど、渋谷でいろいろあって」
「まさか亮、お前がディアボロモンを…」
太一が声を潜めて聞いてくる。
「ディアボロモンって…」
空も表情をこわばらせている。

「やっぱり二人とも知っていたんだね、太一はヒカリちゃんから話は聞いてる？」
「あ、あぁ…」
　太一は信じられないようなものを見るような目で僕を見ている。
「詳しく聞きたいんだけど、とりあえず授業ね、亮君、教科書とか大丈夫？」
「なければ貸してやるぞ？」
「西島先生からもらったから大丈夫、一限は数２だっけ？」
「そうそう、数２は今日小テスト…って、忘れてた！」
「はぁ…昨日言ったじゃない、ちゃんと勉強してきなさいって」
「昨日はＪリーグの試合を夜見ててな、気づいたら２時で」
「ほんと…ばか」
「空、頼む教えてくれ！」
「もう遅いわよ、先生来ちゃったし。亮君はできなくても大丈夫だと思うから」
　そういって空は席に戻っていく。
「やべぇ…」
　残された太一は青ざめた表情で教科書をめくっている。
　そんな姿に笑いがこみあげてきて、僕は太一に伝えてあげた。
「太一、教科書逆だよ」
「小テストの結果だが、全体的にもう少し勉強して来い、そして数名は中間テストを覚悟しておくんだな」
　そんなセリフと共に、数学の担当教官が出て行った。
「太一、どうだった？」
　小テスト後の授業でもうつぶせのまま動かなかった太一に、一応聞いてみた。
「それは残酷な質問よ、亮君」
　空がやって来た。
「部停は…それだけは」
　ぶてい？
「勉強しないのが悪いのよ、丈さんほどとは言わないけど、せめてもう

少しくらい勉強しなさいよ」
「試合近いし」
「言い訳しない」
「ちぇ…オカンかよ…」
「なんですって？」
「なんでもないです」
　ところで、と空は太一の頭を叩きながら声を潜めて切り出した。
「ディアボロモン、あれがまた現れたの？」
「昨日渋谷でね。僕は初めて見たんだけどね、多分」
「ヒカリの話だと、亮が倒しちゃったらしいぞ」
「え？デジモンを？」
「なんか剣がどうとか言ってたな」
「あはは、なんか出ちゃって」
「出ちゃったって、それもだけれど、ゲートが再び開いたってこと？」
「でも俺やヒカリのデジヴァイスにアグモンたちの反応はないぞ」
「その辺りのことなんだけど、二人も選ばれし子供なの？」
　太一と空は顔を見合わせて頷いた。
「後でいいんだけど、どこか三人で話せる場所に行けないかな、デジタルワールドが、僕の記憶にも関係しているらしいんだ」
「だったらパソコン室ね、ヤマトや光子郎君にもメールしておくね」
　この学校にはやはり何人かの選ばれし子供がいるらしい。
「そういえば、ヒカリにメールしてやってくれよ、すげー気にしてたぞ」
　そういって太一は携帯の画面を見せてくる。
「やっぱりみんなガラケー…もう僕がガラパゴスだ…」
「何言ってるんだ、ほら、携帯持ってるよな？」
　昨日政府から渡された端末とは別の携帯を取り出す。
「最新機種じゃん」
「昨日買ってね」
　最新機種と言ってもタッチパネルでもないし、ネットもｉモードだ。

「でも、不思議な縁もあるものね、ヒカリちゃんと知り合って、太一の隣の席だなんて」
「そうだね、僕の知り合いには太一と空さんとヒカリちゃん、それに西島先生くらいしかいないんだし」
そういいながら、さっそくヒカリちゃんにメールを打つ。迷惑メール扱いされないだろうか。

To：Hikari Yagami
From： Ryo Sakurai
Title： 昨日はありがとう
昨日助けてもらった桜井亮です。あの後いろいろあって、この名前になりました。
偶然お兄さん（太一）の隣の席になって、アドレスを教えてもらいました。
この前のお礼もしたいし、今後ともよろしくお願いします。

昼休みがやってきた。
「食堂か、購買か」
西島先生の話では、ここ月島総合高校には結構多きい食堂と、購買部があるらしい。
しかし場所をよく知らないため、購買戦争を仕掛けるなら負けてしまうだろう。
「亮、飯行こうぜ」
隣の太一が勢いよく立ち上がり親指を立てる。
「うん」
「八神君抜け駆け？」
「私たちも桜井君とご飯食べたい～」

「ねぇねぇ、亮君って呼んでもいい？」
「俺たちとも食おうぜ、桜井」
なんだこの熱気は。
「ほんと、新しいもの好きよね、このクラス」
空が肩をすくめながらため息をついた。
「飽きられたら捨てられる？僕」
結局大所帯で食堂を占拠することになった。
弁当組の差し入れや、歓迎の証という名目でサラダをもらいまくった僕は、けっこうおなかが膨れてしまった。
「もう食えない」
「なんかペットみたいなんだもん、桜井君」
「そうそう、なんか純粋っぽいところとか」
「もっと食えよ、そしてラグビー部に入れ」
「俺のサラダ食ったよな、じゃあ今日の放課後はテニス部の見学だ！」
「全く…」
お腹をさすりながら歩く僕の隣で、空があきれたように腕を組んでいる。
「いい人たちだよ…ね」
「基本はな」
太一もさすがに心配そうな顔で隣を歩いている。
だが、一番に定食メニューの野菜を僕に渡してきたことを僕は忘れない。
「放課後はパソコン室に行くからね？間違えてもサッカー部なんていかないでね、太一も」
「行かねぇよ」
そんな話をしていると、ポケットの携帯が振動した。
「あ、ヒカリちゃんからだ」

To：Ryo Sakurai

Ｆｒｏｍ：Ｈｉｋａｒｉ　Ｙａｇａｍｉ
Ｔｉｔｌｅ：　こちらこそありがとうございました
兄ともどもよろしくお願いします。
もし時間がったら夕方昨日の公園にこれますか？

「生身でディアボロモンを倒した、だと」
放課後、パソコン室に集まった面々は、僕と太一の言葉を聞いて絶句していた。
「僕もよく分からないんですけど…どうやら僕はこの世界の人間ではないらしくて」
「いや、責めてるわけじゃない、すまない」
そう口にしたのはハンサムな顔つきをした少年、石田ヤマト。
「確かに、通常の物理攻撃に対してデジモンは非常に強い、足を止めるならまだしも、倒してしまうとなると、やはりデジタルワールドの物質である可能性が高いですね」
そう分析するのは、この部屋をセッティングしてくれた泉光子郎。
「とりあえずピヨモン達に連絡がつかない以上、デジタルワールドの話を亮君にして、記憶を取り戻してもらうことが対策にもつながると思うの」
空がそう言ってみんなの顔を見る。
太一やヤマト、光子郎も頷いている。
「亮は普通の選ばれし子供とは違うんだよな」
ヤマトが腑に落ちないといった感じで問いかけてくる。
「デジヴァイスは持っているんだけどね」
僕はポケットからひび割れたデジヴァイスを取り出して机の上に置いた。
「損傷が激しいですね」
光子郎が触ってもいいですか？と聞くので、僕は承諾した。
「形状は僕らのものと変わりませんが、心なしか色が違いますね」

そういって自分もデジヴァイスを取り出す。
彼ら3人のデジヴァイスは僕のものよりも淡い水色をしている。
「パートナーデジモンがいないというのは不思議ですね」
彼らにはそれぞれ、相棒となるデジモンがいるらしい。
「あえて言えばあの剣がパートナーになるのかな」
「でも、生身でデジモンの相手をするなんて無謀すぎる」
ヤマトの言葉はもっともだ。
前回は意識せず体が動いたが、次もそうなるかどうかの確証はない。
彼らには僕が政府の戦力としてデジモンに対して戦闘を行う義務があることは伝えていない。
ただ、政府によって保護されているという認識で伝えてある。
これはあくまで最終手段である彼ら選ばれし子供たちを前線に立たせないという政府の以降でもあり、僕が彼らを前線に送りたくないという思いもある。
今日は解散、ということでみんなのアドレスを教えてもらって帰路に就く。
ヒカリちゃんにはもうすぐ着くというメールを送って、昨日の公園に向かった。
夕暮れの海は綺麗で、帰りにはこうして回り道していくのも悪くないかもしれない。
「桜井さん」
声をかけられて振り向くと、自転車にまたがったヒカリちゃんだった。
「なんだか不思議な感じだな、まだ自分の名前じゃないみたいで」
「そうかもしれませんね、でも、桜井亮って素敵な名前だと思いますよ」
「ありがとう」
「公園まで歩きましょう」
自転車から降りて歩くヒカリちゃんに、僕は昨日のあれから起こったことを話した。

もちろん、戦闘義務の事は伝えずに。
なんとなく、この子に本当のことを話したら、反対すると思うのだ。
「桜井さんって、一人暮らしになるんですか？」
「うん、あそこのマンション」
そう言って、そう遠くないマンションを指さす。
「あそこって去年で来た新築マンションですよね」
「一人には広すぎるんだよ」
２ＬＤＫなんて、学生の住む家じゃない。
「政府は違いますね…、あ、そうだご飯ちゃんと作れますか？」
「そういえば…分かんないな、適当に外食しようと思ってた」
「ダメです。昨日のお礼もありますから、よかった今夜家で食べませんか？」
「女の子の家に行くのは抵抗が」
「お兄ちゃんもいますから」
確かに男友達の家に行くのなら問題はないのだろうか。
「う～ん、お礼をするのは僕のような気がするんだけど」
「いいえ、私です、もう、桜井さんはいろいろ気にしすぎです」
そういって微笑む姿に不覚にもドキッとしてしまった。
いけないいけない、相手は中学生。
僕がいくつかは分からないけれど。
「じゃあ、お邪魔するよ」
「よかった。じゃあお母さんに三人分って伝えますね、あ、私も作るんですけどいいですか？」
「いいですかって、むしろありがとう」
過去の自分がどんな生活をして、誰の隣にいたかは分からない。
でも、今のこの瞬間はきっとこの先も、記憶が戻っても、大切な記憶になるんだろう。

第六話　ゲート

「ごちそうさまです」
　僕は太一とヒカリちゃんの家で夕食をいただいていた。
「あらもういいの？」
　ヒカリちゃんより早く、太一より遅く食べ終わった僕に、お母さんがお代わりを訪ねてくる。
「とてもおいしかったです」
　記憶を失ってから初めて食べる家庭の味は、とても温かく、なんだか懐かしい感じがした。
「太一は？」
「ご飯のおかわり」
　これで太一は3杯目だ。
「よく食べるね、太一」
「運動してるとこんなもんだって、亮もなんかやってみたらどうだ？」
　デジモンが出現した場合の事もあるし、あまり課外活動には興味を持っていないのだが。
「…お兄ちゃん、サッカー部に入れようとしてるでしょ」
「そ、そんなことねぇよ、でも何がきっかけで記憶が戻るか分からないだろ？」
　太一のいうことも一理ある。新しい名前や戸籍は手に入れたけれど、記憶を失う前の自分に興味がないと言ったらうそになる。
「う～ん、明日から気が向いたら部活も回ってみようかなぁ」
「桜井さん、それ行かない人のセリフだよ」
　ヒカリちゃんが食後のアイスを食べながら笑った。
「そういうつもりじゃないって、どこから手を付けたらいいか分かんないだけで」
「何か今日一日で思い出したことはないんですか？」
「一つだけあるとすれば、勉強に関しては、今の範囲を一度習っているかもしれない」
「え！そうなのか？」

太一がお代わりのご飯を口に運びながらこちらに顔を向ける。
「なんでそんなに目を輝かせているのさ」
「教えてもらおうかなーと、空はあんま教えてくれねえし」
「お兄ちゃんはもう少し自分でやってから聞くべきだと思うの。もともとそんなにできないわけじゃないんだし」
「わかってるよ、で、どんな感じにできたんだ？」
「数学とかに関しては問題は解けるんだよね」
「なんだか不思議な忘れ方よね」
太一のお母さんも不思議そうに言った。
「自分でもそう思います。手法とかは思い出せるんですけど、勉強していた思い出はないんですよ」
「あんまりイメージできませんね」
「う～ん、例えば、折り紙の折り方は知っているけれど、教えてくれた人が誰なのかは思い出せない、みたいな感じ」
伝わるかは分からないが、漠然とした例がそれだった。
「それなら、なんとなくイメージできました」
「そうねぇ、私くらいになるともう何十年前か…年を取るって嫌ね…」
お母さんは別の事でため息をついてしまった。
「今後もこういうことがあるかもしれないし、ゲートやデジモンにあったとき、少しでも考えて対処ができるように、二人にはデジタルワールドの事、教えてほしいんだ」
こうして、八神兄妹の冒険についての講義が始まった。

「一度目の冒険の時、太一は小学5年生だったんだね」
「私は二年生でしたね」
「ヒカリがデジタルワールドに来たのは、少し遅れてからだったな」
「最初のころ、お兄ちゃんすごく心配してたよね」
「そりゃ、危ないときもあるし」
「そんなこと言ったらお兄ちゃんも5年生だったじゃない、それに考えもなく走って行っちゃうんだから」
こんな感じで二人の思い出を聞きながらの話は新鮮だった。

「私はなんだか悪いデジモンたちにも惹かれてしまうことがあって、怖い思い出が多かったな」
「ヴァンデモンに、アポカリモン、ピエモンか」
「亮はデジモンの名前にこだわるんだな」
「うん、デジタルワールドの仕組みも気にはなるんだけれど、例えば現れたデジモンの予備知識があれば、対処の仕方も変わってくると思って」
「そう考えると、俺たちはアグモン達に頼りすぎてるのかなぁ」
　太一がしみじみとつぶやく。
「それぞれの世界の問題が別世界に波及しちゃうっていうのは、少し困ったことだね」
　デジタルワールドが先か現実世界が先か、という問いはあるにせよ、ネット社会の普及が二つの世界の距離を近くしてることに疑いはない。
「それを防ぐためにも、ゲートは閉じられているはずなのだけど」
　ヒカリちゃんもつぶやく。
　彼らにとってデジモンは、家族のようなものなのだろう。だからこそ現状のようにデジモンが敵となってしまう状況を何とかしなければならない。
「みんながパートナーに早く会うためにも、ゲートの仕組みやデジモンとの付き合い方について、研究しなくちゃいけないね」
「うん、本来はデジモンたちも優しい子が多いのに」
　僕はそこに引っかかった。
「そこだよ、政府の人から聞いた話だと、この世界に現れるデジモンは何故か攻撃的なんだ」
「考えてみれば、俺たちのパートナーデジモン以外にこっちに来た奴らは攻撃的なことが多い」
「最初から悪意を持ってこっちに来るようなデジモンが多い気もするけど…」
「そうでない場合には、ゲートを通る過程や、こちらに来てからの混乱で攻撃的になってしまうのかもしれない」

「そうかもしれないな」
太一も過去を思い出して頷いた。
「そこの仕組みさえなんとかなれば、きっとデジモンと人間は分かり合える」
僕は妙な確信を覚えてそう言った。
「お邪魔しました」
八神宅の玄関で靴を履くと、三人に向かって頭を下げた。
時刻は午後9時を回ってしまっている。
太一やヒカリちゃんとデジタルワールドについてすっかり話し込んでしまい、こんな時間になってしまった。
「またいつでも来てね、一人暮らしじゃ栄養も偏っちゃうから」
「今度は料理も教えますから」
ヒカリちゃんが微笑む。
「え？ヒカリの料理？」
「お兄ちゃん？私の料理だっておいしいでしょ？」
「まぁな…最初の方はひどかったけど」
太一がそういうと、ヒカリちゃんは顔を赤らめた。
「そういうことは言わなくていいの！」
「楽しみにしてるよ。じゃあ、おやすみなさい。太一はまた明日！」
そう言って別れを告げ、エレベータに乗った。

政府から渡された携帯電話が鳴ったのは、家に帰ってシャワーを浴びてすぐの事だった。
「はい、桜井です」
『櫻井だ、まったく、紛らわしい苗字になったな』
「それで、用件は」
『新宿区に災害発生だ、下に車が来ている、すぐさま迎え』
適当なジャケットを着てマンションの玄関に降りると、黒塗りのジープが停まっていた。
「お願いします」
素早く助手席に乗り込むと、女性の運転手は車を出した。

「状況はどうなっていますか？」
「対抗電波で押さえていますが、長くは持たないでしょう。レベルⅣの個体だと推測されます」
「たしか成熟期でしたね。そこまで分かるんですか」
「例外はありますが、情報量によって分類しています。成熟期と呼ばれる段階で概ね間違いないでしょう」
　思った以上に研究は進んでいるらしい。
「ちなみに、僕の情報量ってわかっているんですか？」
「あなたは情報の質が異なりましたが、便宜的にレベルⅢとされています」
「成長期ですか」
「ですが、レベルⅥ相当の災害を一方的に倒したということから、あなたは普通の災害ではないということです」
「分かっていましたが、災害扱いなんですね」
「気分を害したなら謝ります。他意はありません」
「いえ、僕自身その辺りにこだわりはないので」
「そうですか、危険だとは思いますが、無事を祈ります」
　それきり会話は打ち切りになった。
　車は赤いサイレンを鳴らし、首都高を疾走している。現場まで後5分ほどらしい。
　右手に握ったひび割れたデジヴァイスを見ると、前回のような熱を感じる。
　やはり、デジモンに反応して機能が立ち上がるのだろうか。
　ゲート、デジヴァイス。
　僕は突如としてあることを思いついた。
「すいません、パソコン、持ってませんか？」
「突然何を、そこのダッシュボードに一応入っています」
　僕は指示されたダッシュボードから重たいノートパソコンを取り出して開いた。
　そしてデジヴァイスを近づける。
「入った」

僕の右手はすっかり画面の中に入っていく。
「すいません、現場の人にノートパソコンを開くように伝えてもらえませんか！」
「え、ええ」
運転席の人は何が起きているのかわからず、慌てて無線で指示を飛ばす。
「準備できたそうです」
「ここまでありがとうございました」
そういって、デジヴァイスのボタンを押す。
Ｇａｔｅ・・・ ｏｐｅｎ
「なんだここは」
これがデジタルワールド現実を結ぶゲートなのだろうか。
大きな配管の中にいるような構造で、ところどころに出口らしき穴があり、目では追い切れない情報が行き来している。
その中をデジヴァイスに引っ張られるようにして進んでいく。
どれくらいが経っただろう、目の前を通り過ぎていく情報量に頭がくらくらする。
遠くに見えてきた一つの穴がひどく損傷している。恐らくあそこが、開いてしまったゲートだろう。
ということは、すでにデジモンは外に出てしまったのだろうか。
僕はデジヴァイスに導かれるまま、その穴に飛び込んでいった。
グォォォォ・・・。
目を開けた先ではどこかの公園で黒い恐竜のようなデジモンが自衛隊員を威嚇していた。
「大きいな」
ゆうに5メートルはあるデジモンの後ろに着地した僕は、すぐにデジヴァイスを押した。
――Ｒｅａｌｉｚｅ
手の中にはこの前と同じ、白銀の剣が握られている。
「あれ？」
この前より重く感じる、さらに発光も前回よりも弱い気がする。

「特務の桜井亮です、これより情報災害の討伐を開始します。みなさんは距離を取ってください」
とにかく自分が戦うしかないのだ。
手順通りに隊員に後退指示を出す。
恐竜型のデジモンもこちらに気付いたようで、振り返り、鋭い歯を見せつけて威嚇してくる。
「なぁ、ゲートの向こうに帰る気はないか」
デジモンは人間と分かり合える、そんな望みを抱いて話しかけてみる。
「いきなりこんな世界に来て、戸惑うのも分かる、僕もそうだから。でも君たちがこの世界で生きるにはまだ早いんだ」
聞こえているのかいないのか、恐竜デジモンはこちらを見たまま攻撃はしてこない。
「僕はゲートを開けるらしい。だから帰ろう」
剣を地面に突き刺し、右手を伸ばす。
デジモンが地面を揺らしながら一歩ずつ歩いてくる。
あと5メートル。
「？」
その距離が3メートルを切ったところで、突然恐竜デジモンが苦しみ始めた。
目が赤い。
またしても体が反応したらしく、右手が勝手に白銀の剣を握り、目の前にかざした。
そこへ黒い炎が襲い掛かった。
ある程度は剣が防いでいるようだが、防ぎきれない炎が肩や脚を焦がす。
「くっ…」
剣を取り落としそうになるが、何とか握りしめたまま、膝をついた。
「どうして…」
先ほどまでとは比べ物にならない敵意を感じる。
公園の木々にも炎は及んでおり、自衛隊員たちが消火を始めてい

る。
『桜井亮、それを倒せ！』
どこからか櫻井の声が聞こえ、僕は仕方なく攻撃に入ることにした。
これ以上周囲に被害を出すわけにはいかない。
被害が広がり、デジモンに悪い評価がされれば、太一たちが描いた共存の可能性も遠のく。
「くそぉぉ！」
思い切り炎を薙ぎ払う。
デジモンに向けて走り出し、そのまま返す手で斬りつける。
確かな手ごたえ。
下腹部を思い切り引き裂いた剣を、今度は斬り上げる。
グォォォ！
断末魔と共に、デジモンが再び炎を放とうとする。
「もう、やめてくれ！」
右手に持った剣を思い切り頭部に向け、力を籠める。
爆発的な力と共に、僕の体は宙に舞った。
代わりにデジモンは情報を霧散させ、消滅していった。
「こんな…」
先ほど経っていた位置から１０メートルは飛んだだろうか、ますます人間でない実感が湧く。
「よくやった、と言いたいが」
いつの間にか隣にいた櫻井が肩に手を置く。
意外と優しいところもあるんだろうか。
「やはりヒーローの戦いじゃないな、現実は」
そう言って、後処理に向かっていく。
残された僕は、立ち上がることもできず、ただ焼け焦げた地面を見つめていた。

第七話　歓迎会

「おはよう、亮！」
　昨夜のことを考えながら朝の海岸沿いを登校していると、後ろから声をかけられた。
「おはよう、空さん」
「空でいいって、どうしたの？元気ない？」
「ちょっと寝られなくてね」
　帰ってからも剣に伝わる感覚が忘れられず、朝方になってようやく少し寝られた。
「新しい環境に慣れるのって大変だものね」
　近いような遠いような言葉。
　そう、慣れなければいけないのだ。
「あのさ、今日の放課後って空いてる？」
　隣を歩く空が、僕の顔を覗き込みながら聞いてくる。
　昨日はあまり意識しなかったが、空も随分と整った顔をしている。
「どこか部活を覗こうかと思ってた」
「あ、そうなのね。そのあとでいいんだけど」
「空いてるよ」
　夕飯を食べるくらいしか予定はない。
「じゃあ、光子郎の家で亮君の歓迎会しようと思うんだけど」
「え、僕の？」
　驚きだ。
「ヒカリちゃんや他の人にも声かけてあるからさ、新しい選ばれし子供として、歓迎したいなって」
　一緒に冒険をした彼らの絆はきっと深いものがあるのだろう。
「いいのかな」
　僕は彼ら違い、デジモンを倒さなくてはならない。
「もちろん！記憶がないって、大変なことも出てくるでしょ。そんな時に頼れる仲間になれたらいいなって」
「ありがとう」

なんとか笑顔を作り、そう答えるので精一杯だった。
「小テストを返すぞ」
どうやらこのクラスでは連日で数学の授業があるらしい。
一人ずつ昨日の小テストが返されていく。
「次、桜井」
「はい」
特に気負いもなく、前へ出ていく。
「なかなか優秀じゃないか」
採点された用紙には１００点の文字。
４問ほどの二次関数の問題だったが、どうやら解き方に間違いはなかったようだ。
ありがとうございます。と言って席に戻ると、隣から太一が覗き込んできた。
「あの先生が褒めるの珍しいんだ、って満点じゃん」
「たまたまだよ」
「そのたまたまの半分でも俺に分けてくれよ…」
『八神』
名前を呼ばれて前に出ていく太一の足取りは重く、顔はこわばっている。
「ちゃんとやってこい」
そういって丸めたプリントで頭を叩かれていた。
「だからいわんこっちゃない」
空もため息をついている。
暗い面持ちで太一は帰ってきた。
「やべぇ」
「何点なの？」
「亮の点数に１００を掛けて、２０を足して４００を引いて、０をかける」
「つまりゼロね」
空が鋭く突っ込んでいる。
「空はどうなんだよ」

「私は８５点」
「ちぇ、優等生ばっかだ」
「この辺はやるかやらないかだと思うよ？」
　パターンを覚えるしかないのではないか。少なくとも僕は覚えている手法を使っただけだから、特別なひらめきが必要な問題ではないのだろう。
「そこをできるのがすごいんだって」
「そこをやらないのがダメなんじゃない」
　空は相変わらず厳しい意見。
「よし、俺は亮に教えてもらう」
「仕方ないなぁ…まず、ノートは取りなよ」
　机の上に教科書しか出ていない太一に向かって僕はため息交じりに言った。
「今日はサッカー部だろ？」
　という太一の誘いを断り切れず、僕は持ってきた体操着に着替えてグラウンドに立っていた。
「まずはパスからだな、俺とやろう」
　太一は2年生の中でも中心選手らしく、新入部員に交じった僕の指導を買って出ていた。
　太一から説明を受けた後、インサイドパスを繰り返す。
「初めての動きじゃないな、でも経験者かどうかは怪しいな」
「そうだろうね、なんだか体の動きがぎこちないし」
　思い通りに足は動くのだが、いまいち完成系の動きをイメージできない。
「これから思い出すってこともあるし、よし、この後の紅白戦に出てみよう」
「え？」
　急に紅白戦に出ろと言われても困る。
　ルールは分かっても各ポジションの動きまでは理解していなかったらしく、中学生からサッカーをやっていたであろう人々と渡り合える気がしない。

「大丈夫だって、この時期は新入生の素の能力を見たいだけだから、テクニックとかは後から努力すればなんとでもなるんだよ」
その考えを勉強にも生かしたらどうだろう。
「分かったよ、言っておくけど期待しないでね」
こうして、僕は強引にも新入生チームのＦＷを務めることになってしまった。
「桜井さん！」
経験者らしき1年生のＭＦから、ボール渡ってくる。
左サイドを任された僕の前には、相手チームとなった太一がいる。
ボールを右足でトラップし、正面から太一と向き合う形になる。
教室では眠そうな太一の目つきが、今は恐ろしいほど鋭い。
サッカーの事だけを考えて生きている、という空の言葉はあながち間違っていない。
素人の小細工など太一には通用しないだろう。
今のボールポジションはハーフラインより3メートルほど進んだ位置、中央のＭＦと右ＦＷが前に出ようとしているものの、ここで太一を突破しなければ、得点に結びつけるのは厳しい。
とすれば、太一の左右どちらかを抜け、味方にパスを送る必要がある。
僕の不安なパス力を考えれば、僕から右を抜くのが正攻法だろう。
しかしそんなことは太一もお見通しだろう。
どうするか。
僕は勢いよく走り出す。
それに合わせて太一も前に出てくる。
左足でドリブルしながら適切な距離を見極める。
秘策というほどではないが、さっきのパスで気づいたことがあった。
太一との距離が2メートルを切ったところで、僕は左足でボールを触り、思い切り体を右に傾ける。
それに合わせて太一も左に動こうとする。
その瞬間、僕は右足でボールに触れ、そのまま左足の踵でボールを

後ろに蹴る。
「バックパス！」
そこへ先ほどパスをくれた後輩が勢いよく走りこんでくる。
僕の左側をトップスピードで駆け抜ける。
体勢が整わない太一は追いつけるはずもなく、後輩は敵陣に切り込んでいき、右サイドのＦＷのパスを出した。
「結局あれが唯一のチャンスだったな」
紅白戦後、グラウンドの端に座って水を飲んでいる僕の下に、太一がやってきた。
「正面切って勝負するべきだったかな」
苦笑いしながら言ってみると、太一はにやりと笑った。
「いいや、判断は正しかったと思うぜ、あの一年生の動きは確かに良かった。素人だからてっきり勝負してくると思っていた俺が甘かったよ」
「勝てるわけないじゃないか、初心者に」
「プレーで勝てても、戦術で負けることもあるんだ、少なくとも亮は俺より冷静だったさ、俺もまだまだだ」
そういって自分も水を飲む。
「どうだった、楽しかっただろ？」
「まぁね」
体を動かし、試合や練習をしている間、昨日の出来事を考える暇はなかった。
「なんだか悩んでるみたいだったからさ」
何気なくかけられた言葉に、僕は水を飲むのをやめて太一を見た。
「気づいてたの？」
「なんとなくな、大体、自分が誰だか分からない中で悩まない奴の方がおかしい」
「それもそうか」
「でも、それだけでもないだろ？亮の場合」
「…」
政府の一員としてデジモンを倒している、など言えるわけがない。

「もし俺とかヒカリとか、言える奴が一人でもできたら、一人で考えずに言えよ？」
「…ありがとう」
時期が来たら、言える日が来るのだろうか。
でも、こうして自分の事を気にかけてくれる人がいることは、本当にありがたかった。
だからなおさら、僕は太一やヒカリちゃんを守りたい。
「今日はこのあと丈やタケルも来るらしいし、きっと楽しくなるぜ」
そういって、太一はグラウンドに戻っていった。

「あ、お兄ちゃーん、桜井さーん！」
部活を終え、軽くシャワーを浴びてから光子郎君の家に向かう途中で、制服姿のヒカリちゃんと、初めて見る男子に会った。
「おう、ヒカリ、タケル」
「久しぶりですね、太一さん。それにそちらは」
男子の方が僕を見た。ヒカリちゃんと同い年くらいだろうか、整った、人好きのする顔だちをしている。
「ああ、桜井亮だ。今日の主役」
太一が説明してくれた。
タケル君も少しは聞いていたようで、さして驚く様子もなく右手を差し出して握手を求めてきた。
「よろしくお願いします、亮さん」
「こちらこそ」
「ところで、昨日ヒカリちゃんの家に行ったっていうのは本当ですか？」
穏やかな笑みで、そんなことを言ってきた。
「あ、あぁ」
「タケル君何聞いてるの」
ヒカリちゃんが若干焦ったように言うと、タケル君は何か察したように笑った。
「いや、うらやましいなと思いまして」

「なんだ、タケルも遊びにこればいいじゃないか」
太一がそう言った。
「そうですね、今度遊びに行きます」
その後は簡単な自己紹介などをしながら、（と言っても僕はもっぱら聞く側になるのだけれど）光子郎君の住むマンションに向かった。

「いらっしゃい、みなさん」
学校からは少し離れたマンションの7階が、光子郎君の家だった。
てっきり家族で暮らしている思ったのだが。
「この家全部、一人で住んでるの？」
僕はあまりの部屋の広さに驚愕の声を上げていた。
僕の中の常識が、高校生にしてこの部屋の広さはおかしいと語りかけている。
「桜井さん？自分の家も大概だと思いますよ？」
ヒカリちゃんが隣でそんなことを言う。
「確かにそうだけれど・・・一体どんなお金持ちならこんな家に子供一人で住まわせられるんだろう」
「知り合いの企業に協力しまして、そのお礼でいくらかまとまった報酬をもらって、そのお金で事務所兼自宅として借りているんです」
恐るべき、選ばれし子供。
「ほら、桜井さん、固まってないで入りましょう」
ヒカリちゃんに引っ張られる形で、リビングに案内された。
「ようこそ！桜井亮君」
そんな垂れ幕が壁にかけられていて、大きなテーブルの上には色とりどりのお菓子が並べられていた。
「すご…」
僕は驚くばかりで、それを見て他の選ばれし子供たちは笑っていた。
「僕は城戸丈、君や太一より一つ上になるんだ、よろしくね」
そういって眼鏡をかけた優し気な少年が声をかけてきた。
「あとはミミちゃんなんだけど、彼女は今海外にいて、今回は参加でき

ないのよ」
空がそう言って、携帯の写真を見せてくれる。
そこにはいかにも元気そうな、華やかな少女が満面の笑みを浮かべている。
「この８人が、最初にデジタルワールドに旅した時のメンバーだ」
壁にもたれかかっていたヤマトが、そう言ってみんなの方を見た。
「あらためて、桜井亮君、これからよろしくね！」
空の合図とともに、みんながクラッカーを鳴らす。
「誕生日会みたいですね」
ヒカリちゃんが笑いながら隣でつぶやいた。
「あ、今日って４月１８日だよね？」
僕が思い出したようにそういうと、丈さんがそうだね、と答えてくれた。
「戸籍上では本当に誕生日だ」
「うっそ！」
「まじかよ！ちょうどいいじゃん！」
「それはすごい偶然ですね！ピザを取りましょう！」
「光子郎さん、これ以上増やすんですか？」
「いいじゃないかタケル、派手にやろうぜ」
「兄さんまで」
「ヤマト、ハッピーバースデイだ、ギター弾いてくれよ」
「俺はベースだって、ギターは持ってないんだよ」
「似たようなもんだろ」
「違うっての、何度言ったら分かるんだよ」
「まぁ、太一に芸術は…ねぇ」
「なんだよ」
急ににぎやかになる面々。
やはりここにいるみんなの絆はとても強く、温かいものだと感じる。
「桜井さんも、もう一員なんですよ？」
いたずらっぽく、ヒカリちゃんがささやきかけてくる。

はっとした僕がヒカリちゃんを見ると、彼女はコップを配りにテーブルの方へ行ってしまった。
得体のしれない僕をこんなにも温かく迎えてくれる彼らの、本当の意味で一員になれたらいいと、ポケットの中のデジヴァイスを握りながら、僕は思った。

「よく食った～」
「ほんとにお兄ちゃんは食べ過ぎ。主役の桜井さんより食べてたじゃない」
「いや、僕はあんなに食べられないよ」
帰り道、僕と八神兄妹は夜の海岸線をぶらぶら歩いていた。
「片付けまかせちゃって良かったのかな」
あの後、予定のあるらしいヤマトと空とタケル君は先に帰り、光子郎君と丈さんが後片付けをしてくれるという事だった。
「お客さんなんだから大丈夫ですよ、私とお兄ちゃんの方が本当は片付けなきゃいけないんですから」
「誰かが亮を送っていって、それがヒカリなのは納得できるけど、なんで俺まで返されてるんだ」
「お兄ちゃんがいると散らかるから」
「ひどくないか？」
「想像はつくけど」
「亮までかよ」
「二日で見破られてるよ、お兄ちゃん」
太一はふてくされたように石を蹴り、僕とヒカリちゃんはそれを見て笑っていた。
そんな中、僕の携帯が鳴った。
「ちょっとごめん」
「ん？誰から？」
「政府の人、多分戸籍の登録の関係じゃないかな」
微妙に嘘をつき、二人から少し離れたところで電話を取る。
『災害発生だ、場所は大手町の建設中のビルだ、すでに人払いはできて

いる。昨日のようにパソコンも用意できた、そちら側から移動できるか』
　昨日発見したゲートを開く能力を使って、素早く向こうのゲートに向かうことになっている。
「パソコンは持っています」
『なるべくゲートを通る前に、対処しろ』
「分かりました」
　一旦電話を切り、二人の元に戻る。
「ごめん、少し用事ができちゃって、先に帰ってて」
「先にって…一人で帰れるのかよ」
「お役人さんに送ってもらうから大丈夫だよ、ごめんね」
　太一はそれなら、と言って納得したようだ。
「桜井さん」
　ヒカリちゃんは何かを見透かすような目で僕を見ている。
「危ないことじゃないんですよね、この前みたいなデジモンを相手にしたり」
「そんなんじゃないよ、明日までに作らなきゃいけない資料があるみたいで、そのための検査らしい」
「…分かりました」
　――Ｇａｔｅ　ｏｐｅｎ
　二人から十分離れた場所で僕はパソコンを開いた。
　この場所なら人通りも少なそうだし、帰りもこのパソコンを使えるだろう。
「行こう」
　こうして今夜も、彼女たちのために嘘をつきながら、僕は戦う。